
厨式病患者の妄想と奇跡

杉 御零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨式病患者の妄想と奇跡

【Nコード】

N1983Z

【作者名】

杉 御零

【あらすじ】

厨2病患者の上杉 良次だが、ある日、山科 理華という1人の少女と出逢い、図書委員に入る事に。理華と楽しく過ごす良次。

しかし、幸せな日々はそう長く続かない。残り少ない時間で本当の気持ちに気付く良次。そして理華を失った時、良次は

なんか、普段自分が絶対書かないようなのにチャレンジしてみ
る事にしました。

割と不定期更新です。できるだけ更新できるように努力しますが。

出逢い

俺の名前は上杉うえすぎ 良次りよじ。

この世に降りて来た神 じゃなくてちょっと厨²病の高校生だ。

そんな俺は今、放課後の学校の図書室で本を呼んでいる。
いつも通り、オカルトやら宗教、神話系の本をよみあさる

つつい熱中して読みふける。

そうして気がつくと6時になっていた。

もう下校時刻か。

本を棚に返して荷物を纏める。

それらの荷物を纏めて、図書室を出ようとした時だった。

ズガーーーーーン。

大きな音が図書室の奥の方から聞こえた。

音的に、本棚が崩れる音だろう。

俺が使った辺りか？

オカルトなどの本は人気がなく、奥の方にある。

俺のせいで倒れたのなら直さないよ。

俺は音のした方へ歩み寄る。

行くと、本棚は倒れていなかったが大量の本が床に落ちて積み重なり、本の山になっていた。

これは酷いな。

そう思って見ていると、本の山がゴソゴソと動いた。

「っ!？」

驚いて飛び退く。

すると、本の下から声が聞こえてきた。

「うう、痛い。誰かいますかー？」

澄んだ可愛らしい女の子の声だった。

一瞬、幽霊か?と思ったが、まあ普通に考えて下敷きになった人
だろうなと思ひ直す。

「大丈夫か？」

声をかけてみる。

「大丈夫 ではないです。本が重くて抜け出せません」

見ると、必死に抜け出そうとしているのか本の山はもぞもぞと動
いていた。

「うー、やっぱり無理みたいです。すみませんが、本を退けてくれ
ませんか？」

しょうがない、助けるか。

こんな状況の人を見捨てるのは流石に後味が悪い。

「いいよ」

「本当ですかっ！ありがとうございます！」

俺が答えると本の下の方は嬉しそうにお礼をしてきた。本当ですか、って断られると思っていたんだらうか。

よし、この本の山をどうしよう。
やっぱり地道にやるしかないのか。

とりあえず、本棚には戻さずどける事にする。

「よいしょ」

ドサッ。

「よいしょ」

ドサッ。

うーん、地道。

「よいしょ」x23回。

ドサドサッ。

そこまでやってようやくほとんどの本の山が消えた。

すると、下敷きになっていた人が抜け出して起き上がった。

「ようやく脱出です」

「そう言って立ち上がった人物は、俺を見てきよとんとした。

「あれ？リヨウジ君が助けしてくれたんですか」

「ああ、そうだよ」

「そうだったんですか。ありがとうございましたっ！」

「そう言って再びお礼をしてきた人物と、俺は少し面識があった。先程まで埋もれていたのはクラスメイトの少女、山科^{やましな}理華^{りか}だった。

「怪我とかない？」

「なさそうだが、一応聞いておく。

「なんせ、本の下敷きになったんだからな。」

「はい、大丈夫です！」

「それは何より。」

「保健室に連れて行く手前が省け　怪我がなくてよかったよ。」

「それより」

「これ、どうする？」

「これ」とは勿論、床に散乱した本の事だ。

「今日はもう帰って、明日片付ける?」

我ながら妥当な提案だと思う。

が、山科さんはそれを良しとしなかった。

「いえ、利用者のためにも今日中に片付けます」

流石だな。素晴らしい責任感だ。

「そっか、じゃあ手伝うよ」

そう提案する。

お人好し?

むしろこの状況で帰れる奴は鬼だと思う。

「え?本当ですか?あつ でも、さっきも助けてもらって片付けまで手伝ってもらうのは気が引けますね。ですからリョウジ君は帰って下さって結構ですよ?」

俺の提案に一瞬顔を輝かす山科さんだが、すぐに遠慮してしまった。

「大丈夫。俺、暇だからさ」

「そうですか。ではお願いしますっ」

こうして山科さんと2人で本の山を片付ける事になったのだが

「とっ、届きませんっ!」

「上の方は俺がやるからいいよ」

「ううう、すみませーん」

山科さんは結構使えなかった。

明らかに届かないのに頑張って上の棚にも本をいれようとする。

正直、見ていて危なっかしい。

何度も本棚が揺れて、その度に冷や汗を流した。

って、あれ？もしかして。

「山科さん。もしかして上の棚に本をいれようとして失敗してあんなった？」

「は、はうっ。そ、そんな事は」

凶星の様だ。

結局、俺がほとんど片付けた。

まあ、いいんだけども。

翌日。

「おはようございます、リョウジ君。昨日はありがとうでございます」

登校したら、山科さんに声をかけられた。

「ああ、あのくらい当然だよ。困ってる人は救済しないと。なんと
って、神だからね、俺」

「神 ですか？あ、そういえばリヨウジ君、“ちゅーにびょー”
という人でしたね」

俺は厨2病的に言葉を返す。

別にお礼を言われて照れくさいとかそういうのではない。

俺は日常的にそんな事ばかり言ってる。

クラスでは俺が厨2病というのは共通認識だ。

今だって、山科さんも少し戸惑ったものの、すぐに納得していた。

「あ、あの」

山科さんがまだ何か言うことがあるようだ。

「何？」

とりあえず尋ねる。

すると、山科さんは深呼吸して告げた。というか、頼んだ。

「リヨウジ君、図書委員に入ってくれませんか？」

「へ？」

いけない。

つい、間抜けな声を出してしまった。

すると、山科さんは早口で説明しだした。

「あ、すみません。いきなりそんな事言われても困りますよね。でも、その、昨日リヨウジ君に助けてもらって、嬉しくて。それで、リヨウジ君となら図書委員やるの楽しいかなと思って。それにリヨウジ君、本好きみたいでいつも読んでるし。それで」

山科さんはあたふたし始めてしまった。

慌てている姿がなんか可愛い。って、何を考えてるんだ俺は。

それより、1つ気になった事がある。

「山科さんって図書委員なの？」

そう聞くと、

「が、がーん。あうう、ショックです。しっかり働いてるのにー！リヨウジ君の貸し出し手続きも今まで何回もしてるのにー！」

そうだったのか。

「昨日の様子からして、仕事しっかりできてるの？」

「ええと、その、たまに、たまーにですけどミスする事もあります」

俺は確信した。

山科さん、たまにじゃなくてしょっちゅうミスしてるな。

というか、頼りないなー、山科さん。

何かこう、守ってあげたくなる。

図書委員、入ろうかな。

どうせ暇だし、俺。

「山科さん。俺、図書委員入る事にするよ」

「本当ですか！？じゃあ早く手続きしましょう！」

嬉しそうにはしゃぐ山科さん。

「今まだ朝だろ？放課後に手続きしよう」

俺は苦笑してたしなめる。

「はい！では放課後一緒に手続きしに行きましょう！」

その日の放課後、俺は図書委員になった。
さて、今日からお仕事頑張りますか。

委員会活動初日

図書委員になった俺は図書室に来ていた。

「で、何すればいいんだ？」

山科さんに尋ねる。

弾みで図書委員になったはいいものの、実際何をすればいいのかわからない。

「そんなに難しい事ではないです。カウンターに座っていて、本の帯出、返却の手続きをするだけですから」

マジか。

案外楽な仕事だな、これ。

「でも、暇じゃないか？」

問題はそれだ。

俺は暇なのが一番嫌いだ。

「それは、そうですね。この学校の生徒ってあんまり図書室使わないですし。ですから、人が来るまでは本を読んでいてもらって結構ですよ」

おお、それはありがたい。

「それと、せっかくリョウジ君が入ったんですから私はお話がしたいです。私、今まで1人でやってたんですよ」

ふーん、で？

「ですから、お喋りしましょう！」

「さて、本でも読むか」

お喋り？

俺は女子かつ！

やんねーよ！

近くにある本を手にとって読む。

何々、『明解、時間論！』だと？

何これ、こんな本借りる人いるのか？

「リョウジ君、無視しないで下さいよー」

何か山科さんが言ってるが気にしない。

俺は本を読みたいんだ。

面白いな、時間論。

「ううう、相手にしてくれない。 どうせ、どうせ私と話したくないんですよ。くすん、くすん」

相手にしてもらえなくていじけ始めた。

それに、まさか泣いてしまうとは。

流石にまずいか？

一見、俺が泣かせてるように見えるし。

「あー、泣くな泣くな。大丈夫、ほら、ちゃんと話聞くから、な？」

「ぐすっ、うう。　本当ですか？」

涙目（というか、既に泣いてる）で上目遣いに聞いてくる。
不覚にも、俺はそれを可愛いと思ってしまっ。

いや、俺は悪くない。

実際、山科さんは可愛い。

金髪だとか、碧眼だとか、そういった特別な点はないが山科さんは一般的に美少女と呼ばれる部類に入ると思う。

髪は肩甲骨くらいまで伸びた黒髪。顔立ちは綺麗というより可愛いといった感じ。背はあまり高くない。そもそもそのせいで本の下敷きになったのだし。胸は　本人に悪いから触れないでおこっ。

「どうしたんですか？　はっ、まさか、やっぱり私と話すのが嫌なんですか？　うう、酷いです。えぐっ、えぐっ、うああん！　リョウジ君のばかあ！　うええん」

しまった、つい考察に入ってしまった。

「さて、別に話すのが嫌な訳じゃない！　無視した訳でもないからっ。まず落ち着け！」

俺がそう言うと山科さんは再び上目遣いで俺をみてる。

「　嘘じゃないですか？」

「ああ、ほら、話し相手になってやるから」

俺がそう言うと、さっきまで泣いていたのが一変、ぱあっと笑顔

になる。

「本当ですね？　じゃあ、リョウジ君が何か話して下さい！　嫌とは言わせませんよっ！　ほら、何か話して下さいよー」

「しょうがないなー、じゃあ俺がこの世界を創った時の事を話してやる」

「はえ？」

『ザ・厨2』 発動！

いきなりの厨2病発言に戸惑う山科さん。

だが甘いな、俺と話すなら自分も厨2病になるくらいの覚悟でないと。

「それは、この世界が生まれるより少し前、いや、時間の感覚がないからかなり前かもしれない、ともかく、この世界が生まれる前の事だった。俺は

そして俺は話し出した。俺の偉大かつ壮大な神話を！

夢物語

話は俺が気まぐれでこの世界を創る所から始まり、愚かな文明を滅ぼしたり、悩める民を救済したりという経緯を辿って現在まで続いた。

という訳で現在に至るんだが。どうだ？　俺の波乱万丈の人生は

すると、山科さんは少し困った様に答えた。

「ええと、よくできた作り話だと思います」

NOオオオオ!

作り話!?

つ・く・り・ば・な・し、だと?

厨2病患者にそれを言うなあああッツ!

がくつ。

倒れる俺。

「リヨ、リヨウジ君っ?大丈夫ですか?」

「心が痛い」

「あの、私のせいだったりします?」

「気にするな。俺が厨2病なのが悪いんだ」

山科さんの心配が逆に心を抉る。

「俺の話は、以上だ」

もうこれ以上は耐えられん。

恥ずかしくて死にそうだ。

「じゃあ、次は私が話しますね」

その後、下校時刻になって図書室を閉めるまで俺は山科さんのお

喋りに付き合った。

こづいづのも、偶にはいいかなと思った。

こづして、この日は終了した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1983z/>

厨式病患者の妄想と奇跡

2011年12月8日00時45分発行